

28 avril 2007



#39 Paris-Tokyo et G. Colbert

第39回は東京お台場ノマディック美術館にて開催中の「ashes and snow」のグレゴリー・コルベールさんのインタビュー。日本語トピックはパリ在住のエッセイスト野口雅子さんのお話。フランス語レッスンはインタビューの中から取り上げます。

☆パーソナリティ

ポプ & ちえ

☆今週のゲスト

野口雅子さん
エッセイスト (パリ在住)

Grégory Colbert
artist

☆情報

「ashes and snow」

ノマディック美術館・お台場
3月11日～6月24日

Générique et intro

Le 28 avril 2007, 39^{ème} numéro de chocolat, magazine bilingue français japonais.

Vivre à Paris ou à Tokyo, c'est un choix qui peut se poser à un couple franco-japonais. Masako, dont c'est le cas, nous en parle..

Grégory Colbert propose à oDaiba une exposition de photo et des films dans un musée construit pour l'évènement. A ne pas manquer!

「パリ在住 雅子さんのお話」

パリと東京を拠点に活躍中のエッセイスト、野口雅子さんに、再度ご登場いただきました。いつお会いしてもエネルギー溢る雅子さん。国際カップルの住まいの好みのお話は興味深かったです。



覚えよう petit à petit ♪

baleine

クジラ

vit < vivre

生きる、生活する

artifice

技巧、策術

imaginer

想像する

horloge

時計

trajectoire

軌道

expédition

探検、遠征の旅

témoignage

証言、証拠、あかし

patience

忍耐、辛抱

pellicule

フィルム

shooter

(サッカーで)シュートする、力いっ

ぱい蹴る

majeur

主要な

enchantement

歓喜、喜び、満足

mutuel

互いの、相互の

guépard

チータ[動物]

crucial

決定的な、非常に重要な

à travers...

...を通じて、介して

partage

分かちあうこと

créer

創造する

filmer

撮影する、映画に撮る

tout à l'heure

先ほど、ついさっき

Grégory Colbert...

Grégory Colbert est Canadien francophone. Il a travaillé longtemps à Paris, et parle couramment le français.

Sur une photo, une jeune femme danse avec des éléphants.
Sur une autre un enfant dort parmi des fauves.

Grégory Colbert : Je m'appelle Grégory Colbert. Je suis un Canadien,... un éléphant, un(e) baleine..., je suis plein de choses.

Bob : Bien, alors, le musée. J'ai vu lentement l'exposition. Presque toutes les photos paraissent irréelles...

G : Je pense que si vous marchez à Shibuya, à Ginza, ou Roppongi, beaucoup de personnes qui sont tribales diraient, « c'est irréel ». Hélas, cela semble irréel parce qu'on vit dans l'artifice total.

B : On pourrait imaginer..., ah oui, bon, on a pu prendre trois ou quatre photos comme ça, mais autant de photos, c'est ça qui paraît fantastique aussi. Vous les avez trouvés comment, ces gens, ces animaux ?

G : Ben (quand j'ai mon horloge...) en fait, j'ai une trajectoire. Ça fait quinze ans que je travaille, donc ça vous paraît peut-être beaucoup d'images. Mais ça fait quarante-quatre expéditions sur quinze ans. Donc, c'est le témoignage de beaucoup de photos, beaucoup de voyages et beaucoup de patience, donc...

B : Quelques kilomètres de pellicules, je suppose...

G : Euh, beaucoup moins que vous pensez..., il y a beaucoup moins. En fait, c'est... Peut-être, vous auriez pensé que, oui, oui, on shoote, on shoote, on shoote ; mais ce n'est pas du tout comme ça. Le travail majeur, c'est de gagner la confiance et surtout que... (quand) on arrive à une telle confiance qu'il y a le désir de partager l'enchantement (qui) est mutuel. Que ce soit avec un éléphant, un orang-outan, une baleine ou un guépard. Ça, c'est le moment crucial, donc. C'est pas à travers des kilomètres de pellicules qu'on arrive là. C'est à travers une ouverture d'esprit et le partage qu'on puisse créer ces choses-là.

B : Vous avez été longtemps avec les hommes et les animaux avant de les filmer, c'est ça ?

G : Ça, c'est là... Là, je suis plus de la moitié de l'année en expédition. Donc, c'est pour ça que vous m'avez dit tout à l'heure que c'est irréel... Que j'arrive à expliquer... Moi, j'aime beaucoup Tokyo, je me sens chez moi. Mais c'est que j'ai la même réaction quand je regarde à travers ma fenêtre à Roppongi.

petite leçon: ぶんぼう一口メモ

1. **paraître**+属詞 (～ように見える); **sembler**+属詞(～のようだ、～と思われる)
「一見すると～に見える」「～のように感じられる」という意味で、断定を避け、主観的であいまいな判断を表わすときにこれらの動詞が使われます。

例) **Elle semble fatiguée.** (彼女は疲れているようだ。)

Elle ne paraît pas son âge. (彼女はそんな年には見えない。)

本文でみられるように、「外見はそうに見えるが(実際はそうではない)」、という内容を背後にともなう場合もあります。

...toutes les photos paraissent irréelles... (すべての写真が非現実のように見えます。)

...cela semble irréel (それは非現実のように思われます。)

...qui paraît fantastique aussi. (...もまた幻想的に思われます。)

...ça vous paraît peut-être beaucoup d'images. (たぶん皆さんからみれば、数多くの映像があるように思われるでしょうね。)

2. **Ça fait** + 期間 + **que** [直説法] (～して～が経つ)

ある出来事からすでにどのくらい時が過ぎたかを表わすとき、この表現が便利です。現在まで続いている事柄にも、過去に起きた事柄にも用います。

Ça fait quinze ans que je travaille. ([この]仕事をして十年になります。)

例) **Ça fait déjà trois ans qu'il est parti.** (彼が発ってからもう三年になります。)

Ça fait longtemps qu'on ne l'a pas vue. (長い間私たちは彼女に会っていません。)

3. **se sentir...** (...のように感じる)

この語は、気分として、感覚や身体でどう感じたかを表わすときに使います。

je me sens chez moi. (私は自分の家のように[くつろぎを]感じます。)

例) **Je me sent mal.** (私は気分が悪い。)

グレゴリー・コルベールの芸術 — 動物と人間が溶けあうおだやかな聖なる時

お台場といえば、東京でいちばん近未来的な新都市の景観が広がる場所のひとつです。そこにいま、古びた数多くのコンテナを積み上げ、古代ローマ風のファサードを備えた壮大なインスタレーション「ノマディック(移動)美術館」が佇んでいます。内部のほの暗い空間には、カナダ出身の芸術家グレゴリー・コルベール氏が記録した、野生動物と人間との神秘的交流の瞬間が映しだされています。見る者は、ひととき、技術革新や進歩や競争社会から引き離されて、野生動物と人間がともに内に秘めた原初のおだやかな聖なる世界にまで連れ戻されるのです。それは、私たちがほとんど体験したことのない驚きに満ちた未知の映像でありながら、それでいてなぜか懐かしい蒼古のイメージを包み込んだ世界です。

6月24日まで開催されるこの写真・映画展《Ashes and Snow》は、コルベールさんが、アフリカからアジア、そして南極に至るまで世界各地を巡る「遠征の旅**expédition**」のなかで、長年にわたって「辛抱強く**patience**」撮影した、野生動物と人間との不可思議な感動的交流を示す「あかし**témoignage**」なのです。

インドの川辺では女性ダンサーがゾウの群と戯れ、アフリカのナミブ砂漠の砂山では、サン族の老婆と子供がチータたちと肌を接して静かな時を過ごします。ビルマでは、横たわる巨大なゾウの耳もとで少年が眠っています。そして、エジプトの古代神殿では、大きなイヌワシ(フランス語で「王の鷲aigle royal」と呼ばれる)が広げた翼の下で、若い娘が踊ります。コルベールさん自身もこの野生動物との交流に加わって、ゾウたちと踊り戯れ、海中で巨大なクジラの群と遊泳します。

こうした驚異的映像は、本インタビューでも述べられているように、見る者を「非現実」の空想世界に誘い込みます。ですから、コンピュータによる合成映像だとか、動物園で飼いならした動物を操った、などと思う人がいても当然でしょう。しかし、登場する動物たちは、(一部は人間に慣れてはいても)すべて野生動物なのです。コルベールさんはこう述べています。「どの動物も調教や訓練は受けていません。人為的な障壁をとり払ってしまえば、自然はわたしたちに協力してくれるのです」。

とはいえ、野生動物と人間をともに撮影し、しかも両者の相互交流interactionまで写し込むとなれば、途方もない困難が伴います。たとえば、チータのそばで子供が恐れ怯えたとき、その子にこの肉食獣が襲いかかろうとしたこともありました。また、海中でコルベールさんがクジラの群と一緒に泳いだとき、無呼吸状態apnéeを保ち空気を吐き出さないよう努めました。クジラからみれば「私はプランクトンのようになっていました」、と彼は冗談めかして語っています。酸素の泡をたくさん放出すると、クジラの攻撃性が刺激されるからです。

心身のエネルギー排出量を極度に低下させ、(ヨガなどにみられる)自己催眠様の状態をつくりだして、動物と同じ水準にまで達すると、人は動物と溶け合って至福の交流を生むのでしょうか。ペットを飼いならし人間の水準に高めようとする場合とは逆に、自然のもつ平衡状態にまで人間が降りてゆくなら、私たちは、ゆったりとおだやかな時が流れる蒼古の世界に到達できるかもしれません。

このとき交流し同化する動物たちは、けっして人間と無縁な存在ではありません。というのも、コルベールさんによれば、彼が撮影した動物種(ゾウ、イルカ、アフリカクロトキ、イヌワシ、ヒョウ、チータ、ヒヒ、ハヤブサなど)は、「遠い昔から人間の神話に登場しqui font partie de la mythologie de l'humanité depuis les temps reculés」、「私たちの集合的想像界に棲みついているqui peuplent notre imaginaire collectif」存在だからです。本来、人間はそうした動物たちと同化できる素地をもっているのでしょう。

さて、最後に、インタビュー冒頭のコルベールさんの言葉をもう一度読み直してみましょう。

《Je suis un Canadien..., un éléphant, une baleine..., je suis plein de choses.》ここで彼は、(通常のフランス語の言い方で)《Je suis Canadien.》(私はカナダ人です)、と述べてはいませんね。では、上記の言葉はどう訳せばいいのでしょうか。「私は、ひとりのカナダ人となり、一匹のゾウになり、イルカになります……。私は多くのものになるのです」、と訳してはどうでしょうか。つまり、彼は、ひとりのカナダ人になることもあれば、ゾウという動物にもイルカにもなる、ということです。ようするに、変幻自在に自分のあり方を変えながら、さまざまな生の様態に同化できる、というわけです。こうした動物との同一化こそが、彼の芸術制作の原点なのでしょう。